全小国研会報

No.９８

発行所
全国小学校
国語教育研究会

事務局
八王子市立
由木西小学校
事務局長 植杉義久

生きて働く力を高める
夏季実践交流セミナー

全国小学校国語教育研究会
会長　長沼　正城

過日、夏季実践交流セミナーが、東京スカイツリーを目の前に臨む、墨田区立第一寺島小学校で開催された。一般参加者120名が集っての学びの場。

全小国研を支えてくださっている顧問・参与等の御来賓をはじめ、協働してくださる全国理事の皆様、そして全小国研の理論と実践の方向性を示してくださる、大塚健太郎先生（文部科学省初等中等教育局教育課程課　教科調査官　国立教育政策研究所　教育課程調査官・学力調査官）や、西川さやか先生（元文科省学力調査官）からご指導をいただくこともできた。模擬授業や実践発表をしてくださった皆様から、授業づくりの活力をたくさんいただいた。

さて、私は、この頁のトピックとして、「模擬授業」をあげたい。それは、過日の全国学力状況調査・国語の問題文を題材にしているからである。

授業者は、若い頃から教師としての基礎基本を勤務校で徹底的に訓練されてきた大村拓也氏（福岡教育大附属福岡小学校）。

氏は、授業前に語っていた。「学習への切実感と資質・能力の自覚の両立が大事だ。」と。主体的に学ぶ動機は、まさに必要感・切実感。さらに、発揮した資質・能力を子供自身が自覚し内在化する学習。私も同感。授業の質の分水嶺だと思う。

助言者の西川さやか氏は、「設問を見てください。ここに“選んで読み”と、“説明しよう”と書かれているのが、授業を改善するポイントのメッセージです」と。「主体的に読む」、「言語活動の明確化」を指し示し、強調された。

今回、模擬授業で扱うのは、「オニグモじいさんの朝ごはん」（読むことの調査問題）。この話は、『はらっぱのおはなし』（松居スーザン著）の中に収録されている。この一冊には「この先、どうなるのだろう？」と好奇心がいや増す世界が展開され、想像力を掻き立てられる話ばかり。情景描写の美しさが頭の中を巡る。つい、物語の世界に引き込まれていく。その中の一つの作品が、「オニグモじいさんの朝ごはん」。この冒頭は、あの徒然草を思い出させる。朝日がのぼる空気感をその色彩で表現されている。児童文学によく登場する「虫」。今回は「クモ」と「ハエ」である。色眼鏡なしの純真さ無垢な子供たちにとっては、楽しいキャラクターである。

このように、作品を何度も読み味わいどっぷりと浸ることが、国語科教育に臨む教師の楽しいひと時である。描写の巧みさ、美しさに、「すてきだな！」という心地よき感動が、しっとりと心に落ちていく快感こそ、鑑賞というものである。それが教材研究の第一歩である。

さて、今回出題の文学的文章で育てたい言葉の力は、一体何であろうか。

学習指導要領解説 国語編を踏まえ、「指導事項」を次のように整理すると、指導の具体が明確になり、適切な言語活動へと連動するにちがいない。整理は、指導事項を、上位「能力」と下位「技能」に立て分けると理解しやすい。

○低学年で扱った場合…「内容の大体を読むこと」が能力。その能力を支える技能は、「誰が何をした」、「時間の経過」、「会話から思い描く人物」等となるだろう。この技能の習得があって初めて、「大体が読めた」という指導事項が身に付いたといえる。

○中学年で扱った場合…「叙述を基に気持ちの変化を読むこと」が能力。それを支える技能は、「性格」、「叙述相互の結びつき」、「心情の変化」、「情景の移り変わり」等となるだろう。

○高学年の学習の場合…「描写を基に、登場人物相互の関係やその人物像を想像し、表現の効果を読むこと」が能力。その能力を支える技能は、「気持ちの変化と行動」、「情景描写」、「人物像」、「全体像」、「クライマックス場面」、「感動やユーモア」、「暗示性」、「メッセージ性」等となるだろう。

私は、特に、作者の思いや願いを想像し、そのメッセージに気付くことが、「テーマ・主題」と直結する大事な視点と考える。文学的文章の命である「内容的価値」がその物語の中に秘沈されている。児童一人一人の感性で読み取らせたいと思う。優しさの中の葛藤、純真さと危うさ、そして共存と自然の摂理。そこにこそ真の読解があり、児童の心に涵養されていくものと信じる。

さて、模擬授業者の大村氏は、児童も教師も「学ぶ形は相似形」だと言う。児童と同じ目線の体験をし、その良さを参加者は実感し、楽しく真剣だった。

大村氏は、楽しく学ぶために、書かせることを減らし、その分、対話していくことを重視していた。詳しくは後の頁に譲るが、次の点に目を見張った。

①抵抗感を減らした対話活動。学び手は、刺激を受け、即発され、良い意味で誘発されていく体験。その中に個別最適な動きと協働学習があった。②学習観点（心に残ったところ）とその理由が高学年の「指導事項」に沿った三つの観点（人物像・全体像・情景描写）で提示されていたこと。

「二学期から、子供たちに授業するのが楽しみになった。」との参加者の声。

暑さの中では額に汗し、学びの中では脳みそに汗する向上の教師の姿。「子供を主語にした授業実践」を積み重ねてほしいと願うばかりである。

（東京都清瀬市立清瀬第四小学校長）

夏季実践交流セミナー特別講演

演題「学習指導要領の趣旨を実現する小学校国語科の授業づくり」

文部科学省　初等中等教育局　教育課程課　教科調査官
国立教育政策研究所　教育課程調査官・学力調査官
大塚　健太郎　先生

一　各種調査結果から

「第四回学習指導基本調査」（２００７年）ベネッセ教育総合研究所によると、国語の指導は教職経験年数が増えるほど、「指導が得意である」と回答する教員の割合が多くなる。このことから様々な解釈が想定されるが、国語科は、教員が学べば学んだだけ、指導技術が向上する教科だと考えることもできる。一方で、この結果が、教員が教材に慣れてきたという理由や、定番教材だからという理由で指導がしやすいと考えているのであれば、注意が必要である。

「日本財団『十八歳意識調査』調べ」（２０２４年）によると、自分自身について回答する項目で、「勉強、仕事、趣味など何か夢中になれることがある」「目標を立て、何かを達成した経験がある」「自分が他人からどのような評価を受けているか気になる」「日々の生活が楽しい」という項目において高い数値となっている。これらの数値は２０１９年の調査と比較しても上昇傾向なっており、今後も生きて働く言葉の力をはぐくむことが求められている。そのために、国語の授業改善が必要であり、授業の際には、一人一人を取り残すことなく、子供の具体的な姿を想定することが重要である。

二　学習指導要領で目指すこと

現行の学習指導要領では、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱に整理された資質・能力を、バランスよく育む必要があることを示している。「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」を自転車の両輪とイメージするならば、「学びに向かう力、人間性等」は、行き先を決めるハンドルと考えると、三つの柱の関係性が理解しやすくなるのではないだろうか。

子供たちが未知の状況に相対した際に、今もっている「知識及び技能」を活用し、「思考力、判断力、表現力等」を駆使しながら問題解決を図っていく。その過程で試行錯誤を繰り返しながら、また、新たな「知識及び技能」を習得していく。さらに、学んだことを社会に生かそうとすることで、「学びに向かう力、人間性等」が育まれていくのである。国語科以外の教科等での取組も視野に入れ、普段から子供の生活を、この資質・能力の三つの柱から確認できるような工夫を教室に取り入れておくことが大切である。

三　「資質・能力の育成のための授業改善」の視点

「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善を行うことで、学校教育における質の高い学びを実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けるようにする。

子供が、興味・関心をもち学習をすすめていくと、子供同士、子供と教員等が、互いの知見や考えを広げたり、深めたり、高めたりする対話的な活動が展開される。この対話的な活動を通して、自分の思いや考えをさらに広げることができる。習得・活用・探究という学びの過程の中で、国語科の場合であれば、言葉による見方・考え方を働かせながら、深い学びの実現に向かっていく。このサイクルを継続することで、さらに資質・能力の育成ができるのである。

四　国語科の目標の確認

国語科の目標は、「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を育成することを目指す」である。「言葉による見方・考え方を働かせ」とは、児童が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり、問い直したりして、言葉の自覚を高めることである。「言語活動を通して」とは、資質・能力を育成するための手段であることを示している。「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」とは、国語科は国語で理解し表現する言語能力を育成する教科であるということを示している。

子供は、日常生活において言葉を使って生活をしているが、言葉に自覚的になることで、「どのように表現すればよいのか。」など、適切な使い方を習得していくのである。

国語科の学習を進めるにあたって、言語活動を行うことが目的になってはいないか、子供の実態に合わせた教材になっているか、言語活動から単元を考えてはいないかなどを確認する必要がある。言語活動は手段であり、目指すべきものは、資質・能力の育成であることに留意いただきたい。

五　学習過程の充実（学習過程の明確化、「考えの形成」の重視）

中央教育審議会答申においては、ただ活動するだけの学習にならないよう、活動を通じてどのような資質・能力を育成するのかを示すため、平成２０年告示の学習指導要領に示されている学習過程を改めて整理している。この整理を踏まえ、〔思考力、判断力、表現力等〕の各領域において、学習過程を一層明確にし、各指導事項を位置付けた。

また、すべての領域において、自分の考えを形成する学習過程を重視し、「考えの形成」に関する指導事項を位置付けた。

（学習指導要領解説　小学校国語科編　９ページ）

六　学習評価の改善の基本的な方向性

学習評価の位置付けを考え、学校全体として組織的かつ計画的に教育活動の質の向上を図ることである。

① 児童生徒の学習改善につながるものにしていくこと

・児童生徒がめあてに結び付けて活動を振り返ることが大切である。

② 教師の指導改善につながるものにしていくこと

・子供の実態を把握して、常に適切な改善を加えることが大切である。

③ これまで慣行として行われてきたことでも、必要性・妥当性が認められないものは見直していくこと

・育成すべき指導事項を適切に評価できる評価方法や場面となっているかなど、再度確認する必要がある。

目指すべきは、資質・能力の育成のための評価にすることである。

七　「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料

事例４　キーワード　「思考・判断・表現」の評価

① 単元名：読んで感じたことや考えたことをまとめよう

（ごんぎつね）（第４学年）Ｃ読むこと

② 単元で取り上げる言語活動：

物語を読んで、理解したことに基づいて、感じたことや考えたことを文章にまとめる。

（関連：〔思考力、判断力、表現力等〕Ｃ（２）イ）

③ 観点別学習状況の評価の進め方

・単元で取り上げる指導事項を確認し、単元の目標と言語活動、評価規準を設定する。その際、適切な時間に評価の場面を設定することが大切である。

・学習活動を行ったときに、どのような子供たちの姿が生まれてくるのかは、学習指導要領に大まかに書かれている。子供の姿から評価をするためには、具体的に子供の姿を想定しておくことが大切である。

・１～３時間目では、評価規準・評価方法としては、「場面の様子や登場人物の言動、様子などを表す語句について着目し、語彙を豊かにしているかを確認」〔知識・技能①〕をワークシートから評価すると設定してある。ここで、「おおむね満足できる」状況の想定は、「場面の様子や登場人物の行動、気持ちや性格を表す言葉を取り上げ、言葉の意味を調べたり他の言葉と比較したりして分かったことをノートに記述している児童」と想定している。

・４～７時間目では、学習課題に応じた展開となっており、児童が　試行錯誤する場面の確保が重要となる。評価規準・評価方法としては、「ごんと兵十の様子や行動、気持ちの変化について想像しているかの確認」〔思考・判断・表現①〕をノートから評価すると設定してある。ここで、「おおむね満足できる」状況の想定は、「登場人物の気持ちの変化を場面の移り変わりと結びつけて具体的に想像し、理由を明確にしながら、ごんの思いが兵十に伝わったかどうかについてノートに記述している児童」と想定している。

八　「令和の日本型学校教育」とＧＩＧＡスクール構想

学習者としての子供の視点を大切に、「個別最適な学び」と「協働的な学び」のそれぞれの学びを一体的に充実させていくことが重要となってくる。それとともに、これまでの価値ある教育実践の蓄積とＩＣＴ機器の効果的な活用を掛け合わせることで、主体的・対話的で深い学びの視点から授業改善につながる学習活動の一層の充実が期待される。

そもそも、「授業は何のために行うのか」を考えると、それは「資質・能力（指導事項）を育成するため」である。そのためには、実際の授業を行う前に「育成された子供の姿の想定」を行うことが必要である。このことにより、学習指導要領の趣旨を実現する国語科の授業づくりができるのである。

従来の知識伝達型の授業や、正解主義が中心であった教育から、資質・能力の育成を目指す教育が求められている。それは、「先生が教え込む授業」から「子供が学ぶ授業」への転換が期待されているということである。

【文責】髙橋　誠人

夏季実践交流セミナー・模擬授業と授業考察の報告

授業者　福岡教育大学附属福岡小学校　教頭　大村　拓也　先生

単元名　物語を選んで読み、心に残ったところを説明しよう
～質の高い言語活動とは『はらっぱのおはなし／オニグモじいさんの朝ごはん』～
―令和六年度 全国学力・学習状況調査 読むことの問題に学ぶ授業改善のメッセージ―

教材名　教科書教材　「はらっぱのおはなし／オニグモじいさんの朝ごはん」作　松井スーザン（令和六年度 全国学力・学習状況調査 読むこと調査問題）

一　実践の趣旨

令和六年度 全国学力・学習状況調査 読むこと調査問題から、児童が「資質・能力」を発揮したくなる状況を作り出す授業づくりを行う

二　実践のねらい

物語を選んで読み、複数の叙述を関連付け、登場人物の心情変化や相互関係、情景描写等を基に人物像や全体像を捉えることができる。

三　授業づくりのポイント

◇質の高い言語活動の条件と資質・能力を踏まえた授業づくり
①夢中・没頭没我　②常時問い続け・問い直す　③知量が善し悪しを決めない　④個別・協働が必然的に起きる　⑤指導事項の達成
①から⑤を踏まえて、児童の資質・能力を発揮できるよう教師が教材・共同体・環境に働きかけることが大切である。また、様々な場面で資質・能力を発揮できるように単元や言語生活への接続を教師が仕組むことで、児童は、資質・能力を発揮している自分を自覚化・内在化できる。「教える」のではなく「引き出す」というイメージをもつことが重要である。

四　模擬授業の実際

（一）指導事項を観点に、心に残ったところと理由を書きまとめる。
「オニグモじいさんの朝ごはん」を読み、付箋に心に残ったところとその理由に近い付箋を選択する。黄色（人物像）、緑（全体像）、青（情景描写）と色分けされた付箋に本文から複数の言葉や文を取り上げながら書き込んでいく。
（二）心に残った理由を話し合い、根拠を付加・修正する。
グループで、付箋を活用しながら話し合う。話合いは、全文シートを活用し、付箋を貼り付けたり、書き込んだりしながら行う。
（三）全体共有し、感じ方の違いを話し合う。
心に残ったところを、観点別に色分けした画用紙を持って、異なる感じ方の読者を探し、根拠や解釈の違いを数多く共有する。
（四）学びを振り返る。
自分の授業像を更新するために、自分自身へ前向きな言葉を残す。

五　授業考察

東村山市立久米川東小学校　校長
元　国立教育政策研究所　学力調査官・教育課程調査官
西川　さやか　先生

○令和六年度 全国学力・学習状況調査の大問三に授業改善のメッセージが書かれてる。そのメッセージを受けて、教師が授業改善をしていくことが大切。また、自校の回答率や無回答率を踏まえて、分析・調査、を行っていくことが重要である。
○全文シートを活用し、付箋を移動しながら交流をした模擬授業のように、児童が根拠をつなぎ理由を深められるような指導をしていくことが児童の資質・能力を発揮することにつながる。
○小学校学習指導要領（平成二十九年度告示）解説国語編」196ページ記載の「教科の目標、各学年の目標及び内容の系統表」を基に質の高い言語活動を単元に明確に位置付けることが大切である。また、学ぶ目的や意義、価値そして楽しさを実感できる言語活動を設定することも重要である。

【文責】山内　隆太

夏季実践交流セミナー授業実践発表と協議会

【第一分科会】　「『伝わった』達成感を実感できる学びの場づくり」
「スイミー」を読んだ感想を伝えよう　―六年生との交流を通して―

発表者　広島市立高南小学校　岩見　拓也　先生

一　主な発表内容

○「スイミー」を読んで想像を広げたことや感じたことを六年生に伝えるという言語活動を設定し、児童が主体的に読むことのできる単元を開発した。

○ペープサートを用いた動作化や大きな挿絵を使って、物語の世界に入り込み、児童の想像が広がるように指導方法を工夫した。

○体育科の表現リズム遊びなどと関連させながら動作化につなげたり、同じ作者の本を教室に置いて、作品の世界観を感じ取らせたり、単元を通した学習の「計画書」を書かせたりするなどした。

二　主な質疑応答

Ｑ　学習の必然性を生むために、課題をどのようにもたせたのか。。

Ａ　六年生との交流が盛んで、その関係性から「六年生に見てもらったら嬉しいね。自慢してみようか。」との投げかけで、課題意識をもたせた。

Ｑ　発表を行うための指導はどのようにしたのか。

Ａ　伝えたいことをノートにメモさせて、それを元に話をするよう指導した。読みを深めさせるために交流をさせて、思い思いに話をさせた。六年生が上手に聞き出してくれたことで読みが深められた。

Ｑ　想像を広げるために本文をどの様に読んでいったのか。

Ａ　児童が大事な言葉に着目したり、動作化を取り入れたりしながら読ませた。交流する時間をとったことで、一人の読みを全体に広げた。

Ｑ　六年生としての学びはあったか。

Ａ　六年生としては、「相手の話を肯定的に聞く」「相手から詳しく聞き出す」という課題意識で取り組み、対話する力が高まっていた。

三　指導助言　　全国小学校国語教育研究会　顧問　岩本　和貴　先生

○より大きな視点で一つの授業を捉える。国語科の学習を通して、豊かに生きる力を付けさせていく。今回の授業では、六年生に自分たちの学びを伝えるという活動を通して、達成感を感じるとともに学ぶことの価値に気付かせることができたと思う。

○普段から異学年交流を行っていることで、六年生との交流は、自然と必然性が生まれ、児童の意欲につながり主体的な学びとなった。

○動作化を用いて想像を広げさせるための準備、想定をしておくこと、そして具体的にどのような想像をさせたいか事前にイメージをしておくとよい。

○学習の目的・意義を常に意識しながら、児童の言動をいつ、どのように評価するかを具体的に児童に示すことができると、さらに学びの質を高められるだろう。

【文責】小原　太一

【第二分科会】「低学年期における「事柄の順序」に関する学習指導の可能性」
―「うみのかくれんぼ」に対する学習者の見方・考え方を中心に―

発表者　山梨大学教育学部付属小学校　石川　和彦　先生

一　主な発表内容

○「事例内の説明の順序を理解しているか」「教材内の事例の順序について考えているか」を確実に育成し、評価をしていくために、教科書にない四つめの事例を検討する学習活動を設定した。

○四つめの事例について、教材内のどの位置に入るか、自分の考えを四カ所から選び、ネームプレートで示した。自分がそのように考えた理由を出し合い、学級内で共有した。

○共有の場の中で、自分の考えを再考したり、自分の考えを言語化したりする活動をねらった。

二　主な質疑応答

Ｑ　四つ目の事例は答えがない。どのような単元の終わり方をするのか。

Ａ　四つ目の事例を本文のどこに入れるかを、そのわけをともなって説明できるようになることが単元の終わりの子供の姿として目指した。

Ｑ　授業後、どのような児童の姿をねらっている。

Ａ　友人の考えを聞いて、自分の考えを再考したり、自分の考えを言語化したりすることができるようになることをねらった。特に事例の順序性に関する見方を児童がもてるようになることを目指した。

Ｑ　理由はどのくらい書けていたか。

Ａ　本時での全体共有の場が効果的に作用し、八割程度の児童が順序性に関する言葉を用いて理由を書いていた。その他の児童も思考途中で、もう少し時間がほしいという内容であった。

三　指導助言　　全国小学校国語教育研究所　阿部　澄子　先生

○事柄の順序など情報と情報との関係について理解することは、低学年でも大切である。「書くこと」「読むこと」「話すこと・聞くこと」どこでも指導事項にもなっている。

○育てたい資質・能力が明確な単元設定であり、学習者の主体的な学びとなった。

○教科書にはない四つめの事例を検討する学習活動を設定したことで、児童が事柄の順序性を考え、さらに、根拠をもって自分の考えを伝えたり、他者の考えにふれたりする活動を通して、自分の考えを再考する学びにつながった。

○四つめの事例を提示したが、時間が許せば、図鑑で自分の選んだ生き物で書く活動もよいのではないと思う。

【文責】市川　こずえ

【第三分科会】「言語活動を豊かにしていく国語科学習」
～読書レビューを通して、自分の考えを広げる児童の姿を目指して～

発表者　千葉県千葉市立花園小学校　石井 桃子 先生

一　主な発表内容

○これからの時代、自ら必要な情報を探し、判断する力が必要不可欠となる。そこで「レビュー」を意見文として捉え、自分にとって有益な情報を選び、信頼できる文を探し出す力の育成を狙った。書いてあることを全部信じないようにすることを強調した。

○子供たちが自分で絵本を選んで読み、選んだ絵本のレビューをレビューサイト「絵本ナビ」で調査した。そして、読みたくなる、主張に納得する、興味をそそるなどの理由から、自分で「信頼できるレビュー」を探し出した。そのレビューを基に、「AIAI モンキー」というアプリとを用いてそれぞれのレビューや感想を書いた。

二　主な質疑応答

Ｑ　この単元は、「読み」なのか、「書き」なのか。また、何をもって評価をしたのか。Ａ　自分の信頼できるレビューを選べるか、それは根拠のある言葉を選んでいるのかを基に評価した。ここは読書単元として扱った。

Ｑ　教科書を用いた授業もしながら、子供たちの語彙力を高める方法を教えて欲しい。

Ａ　この授業の裏の目標として、「語彙を増やす」こともあった。絵本ナビを使ってどんな言葉があるのか、という思いになり他の言葉に触れる機会となっていた。その姿は辞書を引いてみようとか、この言葉を使ってみようとかという思いにさせ、「語彙力」を増やすもとになったように思う。

三　指導助言

全国小学校国語研究所　福本 菊江 先生

○読書レビューは、まずモデル文を示すことが大切である。「レビュー」を書く時は、何文字以内という指定がある。「ちびまるこちゃんの資料」を参考にしながら「一押しの作品レビューを書く」という例が良かった。モデル文を読んで「この本を読んでみたい」と思わせるモデル文が大事。そして、「自分も読書レビューを書いてみたい」と自分の言葉で書かせることである。

○「読書好きの子供の育成」がとても重要である。読書が、語彙を増やすことに繋がっていく。学級文庫を整備し、常に本が読める教室にする。並行読書をしたり、地域の図書館から本を借りたりするとよい。また、子供たちが読んだ本を紹介したり、読んだ本一覧表を掲示したりするなど、子供たち同士で刺激し合うこともよい。

○先生自身が本好きになる。本を紹介したり、山場だけでも読んであげたりする。子供が本に触れる場を設け「本が大好き」という子供を育てて欲しい。

【文責】棚橋 香織

【第四分科会】「言葉のよさに気付き、親しみ、日常生活に生かす単元づくり」

発表者　東京都練馬区立向山小学校　岡﨑 智子 先生

一　主な発表内容

○「二年三組、○○『思い出ブック』を作ろう（二十七時間）」と「二月の日記をくわしくしよう（五時間）」からの実践報告。

○日常生活の中からことばを集めていく「ことばカード」から、俳句作りや給食レポートづくり等の実践を行ってきた。集める言葉については、あらかじめ「指導する言葉や表現の一覧」（年間計画）を作成し、意図的計画的に子供たちに取り組ませてきた。

○さらに日記を詳しく書き表す活動に取り組んだ。「ことばカード」に書き溜めた言葉をつかい、日常生活を日記としてまとめている。年間二から三冊になる。

○自分が詳しくしたい表現を考える活動の場面では、友達との交流を通して、詳しく表現すること意識させ広げることができた。例えば、「大きな声」を、「教室の後ろまで響く声」や「鼓膜が破れるぐらいの声」など、思い思いに言葉を広げさせた。

二　主な質疑応答

Ｑ　二年生に継続的に取り組むに当たって、時間の捻出方法、児童の意欲の維持はどのように行ったのか。

Ａ　二年生で継続的に取り組めるように、教科書に示される同じような指導事項を抱き合わるなどしてカリキュラム・マネジメントで二七時間を捻出し、児童の意欲を維持した。また、言葉を増やすために他の児童の日記の表現を紹介し意欲付をした。

Ｑ　日記を書く時間は、どこで行っていたのか？（授業内だけだと厳しいのではないか）

Ａ　日記を書く時間は、学校にいる間（休み時間や放課後等）の10分ぐらいで書けるようになった。書く題材が見つからない児童は、友達の題材を紹介して気づかせるようにした。

三　指導助言

全国小学校国語研究所　依田 雅枝 先生

○国語科の単元で言語活動に関する指導事項が重複する箇所を精査することで、時間を捻出し、言語活動に関する全体計画（年間二十七時間）を作成している。その「見える化」で年間を見通した単元を構想したという実践である。今回とてもよかったのは、授業実践は、「書くこと」の領域で児童と共に課題や「コツ」を作ったこと、児童が学習内容を理解し話し合いながら、それをもとに作ったりしていることである。そこに授業づくりの根本（教師の考え方や授業観）がある。特に作文は低学年にとって文字抵抗がありすんで取り組みにくくなる学習である。教師の丁寧な見取りがあるからこそ成し得たと言える。

○年間を通して児童の発言を拾って記録し続けている。これが児童自身の学びを自覚することになり、学習の継続につながったのではないかと思う。今後、本実践の評価だけではなく、本単元の評価を明確にしておく必要がある。

○実際、本単元での扱いは「日記」ではなく、「出来事作文」である。その価値は自分の書き残したいことだけを書けばいい。同じ経験をしても心に残ることが異なるものである。今後も指導者自身が自分の使う言葉に自覚的でありたい。

【文責】橋本 誠之

【令和六年度　全小国研　第一回理事会報告】

令和六年度　全小国研第一回理事会が、六月十三日（土）に日本出版クラブにおいて開催されました。

当日は、全国各地から大勢の顧問・参与・理事の先生方にお集まりいただき、貴重なご指導ご助言をいただきながら粛々と議事が進められました。

理事会では、左記の事項につきましてご審議をいただきましたところ、満場一致によりご承認いただくことができました。

一　令和五年度会務報告

第一回理事会（令和五年七月　日本出版クラブにて）

第三十三回夏季実践交流セミナー

（令和五年七月　渋谷区立上原小学校にて）

令和五年度　全国小学校国語教育研究会教員等表彰

（教員表彰　該当者なし）

（感謝状贈呈　広島大会会場校

広島市立白島小学校　様　広島市立本川小学校　様）

第二回理事会・総会

（令和五年十一月十六日　ＪＭＳアステールプラザ）

第五十三回　全国小学校国語教育研究大会　広島大会

（令和五年十一月十六日、十七日）

会報　九十五号、九十六号

二　令和五年度　決算報告

三　令和五年度　会計監査報告

四　令和六年度　新役員選出

会　長　長沼　正城（清瀬市立清瀬第四小学校長）

副会長　間恵　満貴（山陽小野田市立須恵小学校長）

副会長　片岡　有吾（石巻市立前谷地小学校長）

副会長　川辺　章絵（江東区立毛利小学校長）

副会長　中島　亮子（三鷹市立第五小学校長）

副会長　田中　順子（八王子市立高倉小学校長）

事務局長　植杉　義久（八王子市立由木西小学校長）

会計部長　小原　太一（あきる野市立多西小学校長）

企画・組織部長　須釜　久美子（大田区立東六郷小学校長）

庶務・情報部長　髙橋　誠人（墨田区立第一寺島小学校長）

編集部長　市川　こずえ（豊島区立長崎小学校副校長）

研究部長　橋本　誠之（西東京市立柳沢小学校長）

会計監査　有本　香織（八王子市立みなみ野君田小学校長）

富永　大優（福生市立福生第六小学校長）

五　令和六年度　会長挨拶　長沼　正城

六　顧問・相談役の推挙について

【顧問】　加賀田　真理　先生、城戸　祥次　先生

【相談役】佐伯　孝司　先生

七　令和六年度　事業計画

活動方針

（一）研究内容の充実

未来を拓く国語科教育の理念等について、全国組織で研究を推進する。学習指導要領の趣旨を踏まえ、主体的・対話的で深い学びを視点とした授業改善を中心に、確たる実践理論の構築を目指す。

（二）組織の拡大

加入都道府県、政令指定都市との密接な連携を図るとともに、未加入府県、政令指定都市との情報交換を計画的に行って、都道府県研究会、政令指定都市研究会による全国組織の活動を展開する。

（三）財政の確立

恒常的な活動が順調に展開されるように、財政安定化を図る。

事業計画

第一回理事会（令和六年六月十五日）

第三十四回夏季実践交流セミナー（令和六年八月一日）

教員表彰の決定

第二回理事会・総会（令和六年十一月二十八日）

第五十四回全国小学校国語教育研究会　山口大会

（令和六年十一月十六日、十七日）

会報　九十七号、九十八号

八　令和六年度　予算案

九　第三十四回夏季実践交流セミナーについて

十　第三十三回全国小学校国語教育研究会賞について

十一　令和六年度全国小学校国語教育研究会　教員表彰について

十二　令和六年度　第五十四回山口大会について

十三　令和六年度以降の全国大会の開催について

十四　全国小学校国語研究所より

【第五十五回　全小国研　宮城大会の案内】

◆**大会主題**　「小・中・高をつなぐ国語教育の創造」
～学びの深まりを目指して～

◆**期　日**　令和七年十月三十日（木）・三十一日（金）

◆**会　場**　一日目（全体会場）　トークネットホール仙台（仙台市民会館）
二日目（会　場）　仙台市立富沢小学校
仙台市立南光台小学校

◆**主な予定**

○十月三十日（木）
・全体会　開会行事・基調提案
・講演会　文部科学省教科調査官
・記念講演　神戸女学院大学名誉教授　内田樹
・全小国研理事会・総会・レセプション

○十月三十一日（金）
・公開授業・授業研究協議（午前）　・各校六学級（低・中・高学年）
・実践提案発表（午後）　・各校六分科会（計十二分科会）
・閉会行事

◆**同時開催**

第五十八回全国高等学校国語研究連合会研究大会宮城大会
第六十四回全国政令指定都市中学校国語教育研究協議会仙台大会
第七十回東北地区　国語教育研究協議会宮城大会

◆**大会主題設定について**

本県の国語教育において、長年、小・中学校、高等学校の連携を大事にしてきた。前回の東北地区国語教育研究協議会宮城大会（第六十五回・令和元年）以来、「深い学びを目指す国語科教育の創造」をテーマに各校種が実践を踏まえ、コロナ禍にあっても互いに連携し、研究を深めてきている。来年度の全国大会に際しては、「学びの連続性・系統性」を大事にし、小学校における国語教育の在り方について、提案を行う予定である。

◆**大会実行委員長**　片岡　有吾（宮城県石巻市立前谷地小学校長）

【全国小学校国語研究所情報】

［目的］

研究所は、全国小学校国語教育研究会の目的並びに事業を補充する付属機関として機能し、全国小学校国語教育研究会の教育理念と研究構想に基づき、国語教育の創造を通して、わが国の国語教育の充実・発展に寄与することを目的とする

［第十六年次　研究内容］

〈研究主題〉

「言語能力」の育成を目指す国語科指導法の研究
―「個別最適な学び」と「協働的な学び」を基盤とする授業づくり―

〈説明的な文章を読むことを通して〉
「主体的・対話的な学び」の各過程において指導の重点を定め、その学びを支える「学習の個性化・指導の個別化」と「協働的な学び」が一体的に進むための手立てを講じる。

［第十六回　研究発表会　報告］

日時　令和六年十一月十六日（土）午後一時　開会　四時半　閉会
会場　東京都中野区立教育センター（みらいステップなかの）
内容　○研究発表　研究主題設定の理由及び研究の概要
○授業提案（参加者交流型）
低学年分科会　第三学年『ありの行列』
高学年分科会　第五学年『想像力のスイッチを入れよう』

記念講演・講師
「小学校国語科における学習指導要領の趣旨の実現のために
―指導上の課題と求められる改善のための視点―」
文部科学省初等中等教育局教育課程課　教科調査官
国立教育政策研究所　教育課程調査官・学力調査官
大塚　健太郎　先生

○低・高に分かれた分科会では、各学習指導案を基に「授業づくりの三つの重点と指導の手立て」について提案した。これを受けて、参加者一人一人が様々な実践事例とその事例についての考えを交流して、「国語科が目指す資質・能力を身に付けさせるための授業づくり」について共有するとともに、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善について話し合った。